15	上越教育大学附属中学校	27～30

平成３０年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

高度情報社会，少子高齢社会，グローバル社会の時代に求められる資質・能力（アビリティ）をバランスよく総合的に身に付け，「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育成する教育課程及び指導方法の研究開発

２　研究の概要

教科「グローバル人材育成科」を新設し，各教科との両輪で，これからの社会に求められる資質・能力を育成する。育成すべき資質・能力を６つに整理してアビリティと名付け，その特性により，Ａ群（情報統合力・代替思考力），Ｂ群（企画創造力・主体的実践力），Ｃ群（コミュニケーション力・コラボレーション力）の３つに配分した。それぞれをバランスよく総合的に育成するため，「グローバル人材育成科」では，課題討論の時間（主にＡ群育成），企画創造の時間（主にＢ群育成），グローバルコミュニケーションの時間（主にＣ群育成）を分野として設定した。具体的には，①「グローバル人材育成科」と「各教科」の指導内容や指導方法，②「グローバル人材育成科」におけるアビリティの評価，③アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価，④研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価，⑤教育課程の年間指導計画及び学習指導要領の作成，の５点について提言を行う。

３　研究の目的と仮説等

⑴　研究仮説

「グローバル人材育成科」を新設し，各教科と両輪でこれからの社会で求められるアビリティを育成する教育課程を編成することで，「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育むことができる

「持続可能な社会を創造する」とは，これからの社会に適応するのではなく，地域や世界の実態に目を向け，未来の社会を自ら創り上げることである。「自己を確立できる」とは，様々な経験を通して，自らを客観的に見つめ，正しく行動できることである。そのために必要な，これからの社会で求められる資質・能力を，当校ではアビリティと名付け，「持続可能な社会を創造すること」「自己を確立すること」を「アビリティをあらゆる場面で発揮すること」と同義とした。そして，本研究で目指す生徒をグローバル人材と捉え，その姿に迫るためには，アビリティの育成を意図的，計画的に行う新教科を創設し，新たな教育課程を編成することが有効であると考えた。

⑵　教育課程の特例

・アビリティを育成する教科「グローバル人材育成科」の設置
・「グローバル人材育成科」の設置のため，各教科の時数を一部削減
・「グローバル人材育成科」の設置のため，総合的な学習の時間を全部削減

４　研究内容

⑴　教育課程の内容

1)　グローバル人材育成科

グローバル人材育成科は，「課題討論の時間」「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」の３つの分野からなる。アビリティをその類似した特性から２つずつにまとめること

で，より効果的に育成できると考え，３つの分野に配分した。ただし，配分したアビリティのみを育成するのではなく，主に育成するという捉えである。

①　課題討論の時間

主として【情報統合力】【代替思考力】の育成の場である。「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」における活動を振り返り，課題の改善に向けて具体的方策を練り上げる。また，現代，近未来における喫緊の課題をテーマとし，実践的討論の技能や討論に臨む姿勢や態度の向上を目指して活動に取り組む。

②　企画創造の時間

主として【企画創造力】【主体的実践力】の育成の場である。自分たちの日常や生徒会，「グローバルコミュニケーションの時間」の活動について企画立案し，活動に向けた準備や試行を行う。活動を創り上げていく喜び，主体的に取り組むことの大切さについても学ぶ。

③　グローバルコミュニケーションの時間

主として【コミュニケーション力】【コラボレーション力】の育成の場である。様々な体験活動を通して，多様な他者との関わりを広げ，これからの社会の在り方，自分の在るべき姿について考えを深める。そして，言語活動やグループワークによる協働的な学び合いを行い，実践的に【コミュニケーション力】や【コラボレーション力】を高める活動に取り組む。

また，グローバル人材育成の視点としては，以下の３つを重視した。

・アビリティ育成の素地となる『スキル』の向上
・実践場面を通したアビリティの育成
・ＥＳＤの概念形成

アビリティそのものが，具体的にどのような行動，技能，又は態度として表れるのかを『スキル』として以下のように細分化し，これをアビリティ育成の視点とした。

	アビリティ		『スキル』	『スキル』の具体
課題討論の時間	情報統合力	課題や目的に応じて，必要な情報を集め，まとめる力	情１　情報収集	調べる，記録する，取材する，問題点を把握する
			情２　情報整理	比較する，分類する，分析する，優先順位を付ける
	代替思考力	課題の問題点や物事の本質を捉え直す力	代１　思考拡散	アイデアを出す，アレンジする，代案を出す
			代２　比較検討	視点を設定する，吟味する
			代３　思考収束	ひとつにまとめる，折り合いを付ける
企画創造の時間	企画創造力	周囲の状況や動向を予測しながら，みんなのためになる活動を創り出す力	企１　目標設定	ゴールをイメージする，課題を明らかにする
			企２　手段構築	役割分担する，日程調整する，計画を立てる
	主体的実践力	内容や活動を調整しながら率先して行動する力	主１　渉外調整	外部の人と目標・手段を共有する
			主２　準備試行	リハーサルする，試作する，シミュレーションする
			主３　役割遂行	自分の役割を果たす，進んで行動する
グローバルコミュニケーションの時間	コミュニケーション力	情報を受信したり，発信したりしながら，様々な考えや意見を認め合い，人やものとの関係を広げる力	コミ１　相互理解	受容する，認め合う，互いの立場で目的を理解する
			コミ２　即応思考	アドリブで対応する，相手を乗せる，相手の様子に応じて話す
			コミ３　情報発信	要点を絞って説明する，より的確に伝達する
			コミ４　礼儀作法	時と場に応じた挨拶や言葉遣いをする，謙虚に相手の話を聞く
	コラボレーション力	異なる分野や目的をもった集団が，協力して制作する力	コラ１　協働創造	協力して新しいものを創り上げる
			コラ２　互恵行動	行動して，互いの利益を生み出す

年間指導計画の作成に当たっては，３年間を 10 のステージに分割し，３つの時間の中で各学年に応じて「『スキル』向上コンテンツ」と「『スキル』向上トレーニング」を設定した。『スキル』向上コンテンツは，学校行事や生徒会など既存の活動をアビリティ育成の視点で捉え直し，生徒

が『スキル』を統合的に発揮できる実践場面となるよう設定した。また,『スキル』向上トレーニングは，学習が単発的，形式的なものとならないよう，コンテンツで発揮を期待する『スキル』を明示した上で，発達段階や時期に応じた例題やシミュレーションに取り組む時間となるよう設定した。

ＥＳＤの概念形成については，学習事項（特に持続可能性についての知識・理解）や学習活動と関連する『スキル』(特に持続可能性についての能力・態度）として位置付けた。近未来における喫緊の課題を取り上げ，諸問題への理解を深めるだけでなく，自ら参加しようとする態度や具体的な行動を伴う問題解決能力の育成を通して，持続可能な社会を形成することの重要さを実感させることを重点とした。

評価については，学習活動に対して，どの程度アビリティを発揮することができたのかという視点で，ステージごとに作成したルーブリックを活用し，生徒による自己評価を行った。ルーブリックの評価用紙には，各ステージで学習する内容や目指す姿，向上を目指す『スキル』が示されており，共通で設定されているＡ目標よりも高次のＳ目標を生徒が自ら設定した。このＳ目標はステージの最中に何度でも追加，修正してよいこととなっており，ステージ終末に蓄積した学びや活動の記録を振り返り，最終的な自己評価を行うこととした。教師からは数値による評価を行わず，生徒の学習状況や向上を目指す『スキル』の発揮について，活動の様子やポートフォリオなどから継続的に把握し，どのような場面でどのように『スキル』を発揮したか，アビリティを視点とする文章記述による評価をステージごとに行った。

第４年次は,『スキル』向上コンテンツと『スキル』向上トレーニングの内容を見直し，年間指導計画の更なる改訂を行った。具体的には，これまでの２年間の生徒の『スキル』向上トレーニングの経験，コンテンツで実際に見られた『スキル』を発揮した生徒の姿，活動で生じる問題点や配慮すべき点などを基に，トレーニングとコンテンツのつながりを重視して，それぞれの割り当て時数や配列を改訂した。

また，向上を目指す『スキル』をより自覚して，実践場面で選択的に活用できる生徒の育成を目指し，学級ごとに行っていたステージ冒頭のガイダンスを学年一斉で行うこととした。ガイダンスでは，ステージにおける学習内容の説明だけでなく，同じステージで前年に見られた，実際に『スキル』を発揮している生徒の姿やポートフォリオの記述を紹介した。実現可能な目標となり得る姿，振返りに役立つ効果的な記録の具体例を学年全体で共有した上で，Ｓ目標の追加・修正はこれまで同様各自のタイミングでできる時間を保障し，さらに，各ステージの適切な時期に一斉に見直しをする時間を年間指導計画に位置付けた。

2) 各教科

学習事項の習得とグローバル人材育成の視点としては，以下の２つを重視した。

・学習活動に関連したアビリティ育成の素地となる『スキル』の向上

・ＥＳＤの概念形成

各教科では，学習事項習得のための学習活動が『スキル』とどのように関連しているのかを明確にし，年間指導計画の学習活動に向上を目指す『スキル』を位置付けた。教師が『スキル』向上を意識して学習指導に当たることで授業改善を進め，これまで以上に多くの生徒が教科の目標や単元・題材のねらいを達成すること，その中で二次的に『スキル』を向上させることを目指した。ただし，各教科において学習活動と全ての『スキル』を関連させるというものではなく，その単元・題材で最も効果が期待される活動に焦点を当てた。『スキル』向上自体は教科本来の目標ではないため，学習活動に位置付けられる『スキル』は教科ごとに差があり，全教科を合わせても偏りが出てくるが，教科単独で向上を目指すことが難しい『スキル』は，グローバル人材育成科で補完することとした。

ＥＳＤの概念形成については，グローバル人材育成科と同様，学習事項（特に持続可能性についての知識・理解）や学習活動と関連する『スキル』（特に持続可能性についての能力・態度）として位置付けた。

評価については，現行の学習指導要領に基づき，国語は５観点，その他教科は４観点で観点別評価を行った。なお，道徳については，観点別評価と本研究における評価の趣旨が異なるため，評価を行わないものとした。

第４年次は，学習活動において設定される生徒の姿が，教科の目標に迫る姿として適切なものとなるよう，どの学習活動にどの『スキル』を設定するか見直しを行った。あわせて，他教科で有効だった手立てやグローバル人材育成科を含む各教科の年間指導計画を参考に，設定した『スキル』を発揮した姿に迫る手立てが学年や時期に応じたものとなるよう見直して授業実践を行った。

また，生徒自身が，学習活動において『スキル』を発揮した姿を認知しやすくなるよう，『スキル』名の書かれたマグネットを各教室に配備した。教師が授業の導入時に活動で発揮を期待する『スキル』を提示したり，展開時に実際に『スキル』を発揮した生徒の姿を捉えてその場で提示したり，終末時に活動を振り返って生徒が発揮した『スキル』を整理したりして，教科を問わず活用を図った。

3) その他

・グローバル人材育成科や各教科以外にも，希望する生徒にブリティッシュヒルズ英語キャンプの機会を設定した。

・生徒一人一人がタブレット端末を持参し，学習用として使用している。校内のネットワークを通じて，生徒が互いに情報を共有したり，共通資料を配付したりするなど，情報運用に関わって活用した。

⑵ 研究の経過

第１年次	・教職員のみとりや生徒，保護者への意識調査から，「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」に関わる実態を捉え，各評価のための指標を具体化した。 ・教職員のみとりや生徒，保護者への意識調査から，「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」に関わる実態を捉え，教育課程を構築した。 **○新設教科「グローバル人材育成科：課題討論の時間，企画創造の時間，グローバルコミュニケーションの時間」で育成するアビリティや学習内容や学習方法を，各教科の実践を通して探りながら年間指導計画を作成していくとともに，アビリティを評価する具体的な指標を明確にした。** ・各教科の時数減に伴い，指導内容を整理し，年間指導計画を作成した。 ・研究の内容についてグランドデザインをまとめ，家庭・地域に向けて情報提供を行った。
第２年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程を実践した。 ・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程や指導方法を評価し，第３年次に向けて教育課程を再構築した。 **○「グローバル人材育成科」の学習内容，学習方法についてアビリティの評価を通して分析し，必要に応じて活動内容の改善や年間指導計画の修正を行った。** ・３つのアビリティ群にまとめた効果について，授業研究や日常の生徒の姿を指標と照らし合わせ分析した。 ・研究の内容について研究たよりを４回発行し，家庭・地域に向けて情報提供を行った。 ・研究発表会を開催し，広く意見を求め，研究に生かした。

第３年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程を実践した。 ・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程や指導方法を評価し，第４年次に向けて教育課程を再構築した。 ・「グローバル人材育成科」の学習内容，学習方法についてアビリティの評価を通して分析し，必要に応じて活動内容の改善や年間指導計画の修正を行った。 **〇３つのアビリティ群と 16 の『スキル』にまとめた効果について，授業研究や日常の生徒の姿を指標と照らし合わせ分析した。** ・研究の内容について研究たよりを４回発行し，家庭・地域に向けて情報提供を行った。 ・研究発表会を開催し，広く意見を求め，研究に生かした。
第４年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程を実践した。 **〇「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を育む教育課程や指導方法を評価し，その成果を明らかにした。** **〇「グローバル人材育成科」の学習指導要領を，第３年次までの成果と第４年次の実践を基に作成した。** ・「グローバル人材育成科」の成果や有効性などを研究たよりにまとめ，家庭・地域に向けて情報提供を行った。 ・４年間の取組の成果として研究発表会を開催し，教育課程開発の効果を全国に発信した。

※〇は，年次ごとの重点を表す。

⑶　評価に関する取組

第１年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」に関わる実態を捉えるため，教職員，全校生徒，保護者を対象に実態調査を行った。(2015 年７月，12 月) ・育成すべきアビリティが発揮されている具体的な生徒の姿を分析し，資質・能力を評価する具体的な指標を明確にした。 ・学校評議員会（2016 年３月）や運営指導委員会（2015 年５月，８月，2016 年２月）で，生徒の姿を基に「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒を育む教育課程」について検討し，意見を整理し，改善に生かした。 ・教職員による教育課程評価を実施した。(2015 年 12 月)
第２年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を評価（３年生を対象として 2017 年２月にパフォーマンステストを実施／全校生徒，保護者を対象として 2016 年７月，12 月に研究に関するアンケートを実施）し，目指す生徒の姿に迫れているかどうか，また可否の場合のそれぞれの要因はどうかなど，結果を分析した。 ・３つのアビリティ群にまとめた効果について，授業研究や日常の生徒の姿を指標と照らし合わせながら成果と課題を整理し，新設教科による教育活動の改善を行った。 ・学校評議員会（2016 年６月，2017 年３月）や運営指導委員会（2017 年９月，10 月）で，生徒の姿を基に「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒を育む教育課程」について検討し，意見を整理し，改善に生かした。 ・教職員による教育課程評価を実施した。(2016 年 12 月)
第３年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を評価（２年生を対象として 2017 年６月に，３年生を対象として 2016 年６月，2018 年２月にパフォーマンステストを実施／全校生徒，保護者を対象として 2017 年７月，12 月に研究に関するアンケートを実施／３年生を対象として 2018 年２月に「持続可能な社会」に関する筆答検査を実施）し，目指す生徒の姿に迫れているかどうか，また可否の場合のそれぞれの要因はどうかなど，結果を分析した。 ・全校生徒を対象に数研式標準学力検査（2017 年４月：ＮＲＴ／５月：ＣＲＴ），数研式学習適応検査（2017 年４月：ＡＡＩ）を実施し，教育課程と学力との関連を分析した。

	・３つのアビリティ群と 16 の『スキル』にまとめた効果について，授業研究や日常の生徒の姿を指標と照らし合わせながら成果と課題を整理し，新設教科による教育活動の改善を行った。 ・学校評議員会（2017 年５月，2018 年２月）や運営指導委員会（2017 年６月，10 月）で，生徒の姿を基に「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒を育む教育課程」について検討し，意見を整理し，改善に生かした。 ・教職員による教育課程評価を実施した。（2018 年１月）
第４年次	・「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒」を評価（２，３年生を対象として 2018 年６月にパフォーマンステストを実施／全校生徒，保護者を対象として 2018 年７月，12 月に研究に関するアンケートを実施）し，目指す生徒の姿に迫れているかどうか，また可否の場合のそれぞれの要因はどうかなど，結果を分析した。特に，３年生の３年間の経年変化の分析を詳細に行い，成果と課題を明らかにした。 ・全校生徒を対象に数研式標準学力検査（2018 年４月：ＮＲＴ／５月：ＣＲＴ），数研式学習適応検査（2018 年４月：ＡＡＩ）を実施し，教育課程と学力との関連を分析した。 ・３つのアビリティ群と 16 の『スキル』にまとめた効果について，授業研究や日常の生徒の姿を指標と照らし合わせながら成果と課題を明らかにした。 ・学校評議員会（2018 年５月）や運営指導委員会（2018 年６月，10 月）で，生徒の姿を基に「持続可能な社会を創造し，自己を確立できる生徒を育む教育課程」について検討し，意見を整理し，成果と課題を明らかにした。 ・教職員による教育課程評価を実施した。（2018 年 10 月） ・研究発表会（2018 年 10 月）を行い，４年間の取組の成果と課題を整理した。

５　研究開発の成果

⑴　実施による効果

1)　生徒への効果

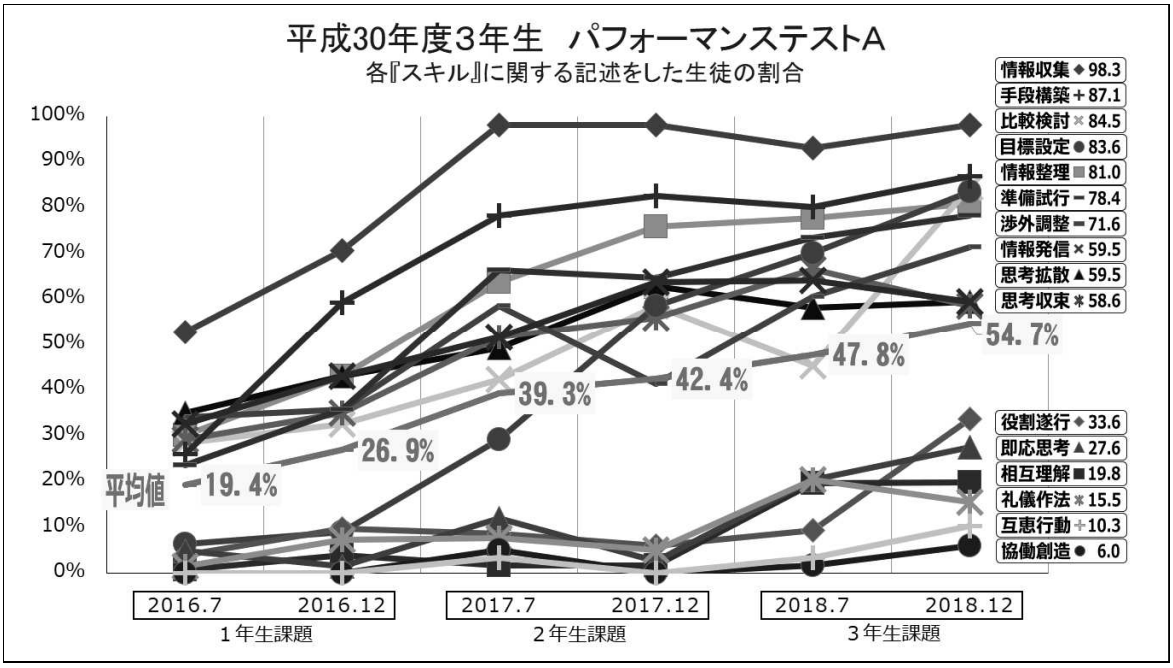
①　パフォーマンステストの結果から

本研究では，以下の３つをパフォーマンス課題とし，生徒の『スキル』の定着状況やアビリティの発揮状況をみとるパフォーマンステストを実施した。

１年生	附属中学校が修学旅行でお世話になっている上越市の旅行業者に，長野市内の小学校から次のような依頼が入りました。 「今まで，修学旅行は佐渡に行っていたのですが，もし上越地域で魅力的な修学旅行ができれば，移動時間の短縮になり，多くの場所を回ることができるので，そうしたいと考えているのです。何かプランを作ってもらえないですか？」 困った旅行業者の方から，小学生に年齢が近い附属中生の意見を是非聞きたいという連絡が入りました。旅行業者の参考になるような上越地域を巡る修学旅行の案を作り，５分間で発表してください。
２年生	独立行政法人防災研究所が主催する「防災パンフレットコンテスト」に応募することになりました。 国民の防災意識を高めるために，研究所が主催したコンテストです。応募内容は，研究所が作る防災パンフレットの表紙に用いられる「キャッチコピー」と自然災害への備えをまとめた「パンフレット内容」の2つです。 採用された場合，あなたの作ったキャッチコピーとパンフレットの内容がウェブで配信されます。また，副賞として，国内の防災視察ツアーに参加できます。提案するキャッチコピーとパンフレットの内容を考え，５分間で発表してください。
３年生	個人で株式会社を起業するには，最低 300 万円程度は必要であると言われています。 附属中では，大企業である附属電器産業が主催する，中学生を対象とした「夢をつかめ！起業コンペ」に応募することになりました。優勝者には，賞金 300 万円が７年後の 22 歳の春に贈られます。 コンペの審査内容は，審査員に対する５分間のプレゼンテーションです。５分間の使い方は自由ですが，①その会社を起業する理由，②300 万円の使い方は必ず説明しなければなりません。５分間のプレゼンテーションの内容を考えて，実際に発表してください。

行動計画を筆答で行うパフォーマンステストＡ（７月，12 月実施）の 2018 年度３年生の結

果，複数で実際に活動して課題解決に当たるパフォーマンステストＢにおける抽出生徒の結果は以下のとおりである。



＜パフォーマンステストＢ（2018 年６月実施）の抽出生徒の発揮した『スキル』＞

アビリティ	『スキル』	生徒①（３年男子）		生徒②（３年男子）		生徒③（２年男子）		生徒④（２年女子）	
		A 2017.12	B 2018.6	A 2017.12	B 2018.6	A 2017.12	B 2018.6	A 2017.12	B 2018.6
情報統合力	情報収集	○	○	○	○	○	○	○	○
	情報整理	○	○	○	○		◎	○	
代替思考力	思考拡散	○	○	○	○		◎	○	○
	比較検討	○	○	○	○	○	○		◎
	思考収束	○	○	○	○		◎	○	○
企画創造力	目標設定	○	○	○	○				◎
	手段構築	○	○	○	○	○	○	○	○
主体的実践力	渉外調整		◎	○					
	準備試行		◎		◎		◎	○	○
	役割遂行				◎				◎
コミュニケーション力	相互理解				◎		◎		
	即応思考		◎		◎		◎	○	○
	情報発信		◎	○	○		◎	○	○
	礼儀作法		◎		◎				
コラボレーション力	協働創造								
	互恵行動		◎		◎				

※○は１回以上『スキル』が発揮されたと判断できたもの，◎はテストＢで新たに発揮されたものを表す

パフォーマンステストＡの『スキル』出現率の経年変化のグラフから，多くの『スキル』で出現率が高くなっていることが分かる。２年生まで出現率の低かった［ｺﾐ１　相互理解］や［ｺﾐ２　即応思考］の出現率が３年生で増加傾向を示していることから，本教育課程の後半に進むにつれて，【コミュニケーション力】の素地となるこれらの『スキル』がより意識されていくと

考える。パフォーマンステストＢのテストＡとの比較から，活動に伴って実際に次々と場面が展開していくテストＢでは，各自の学びに基づいた【主体的実践力】【コミュニケーション力】【コラボレーション力】がより意識されるようになることが分かる。また，３年生と２年生の比較から，本教育課程の後半へ進むほどその意識が顕著になると考えられる。

②　持続可能な社会に関する筆答検査の結果から

ＥＳＤの概念形成について，グローバル人材育成科及び各教科における学習事項（特に持続可能性についての知識・理解）として位置付けた内容について，正しい理解や知識が得られているか，３年生を対象に筆答検査を行った（2017 年２月実施，n=118）。各教科やグローバル人材育成科での既習事項について，持続可能な社会づくりの構成概念※を参考に，以下の問いを設定した。

問題１　持続可能エネルギー（再生可能エネルギー）には，どのようなものがあるか。知っているものを全て書きなさい。【多様性】

問題２　海洋資源にはどのようなものがあり，どのように利用されているか。また，それらの資源を継続して使うため，どのような対策が進められているか。それぞれ知っているものを全て書きなさい。【有限性】【責任性】

問題３　陸の生態系（生態ピラミッド）が保たれる仕組みを，図を用いて説明しなさい。【相互性】【有限性】

問題４　地球温暖化の原因，それによる影響，その対策にはどのようなものがあるか。それぞれ知っているものを全て書きなさい。【相互性】【連携性】

問題５　地球温暖化が解決に向かわない原因について，以下の４つの語を用いて説明しなさい。同じ語を何回使用してもよいが，全ての語を用いること。【公平性】【連携性】【責任性】

・温室効果ガス　・先進国　・新興国　・国益

問題６　生物多様性はなぜ重要なのか，説明しなさい。

各問題の通過率は以下のとおり。

問題１	問題２	問題３	問題４	問題５	問題６
87.2％	72.2％	63.0％	74.1％	66.7％	61.1％

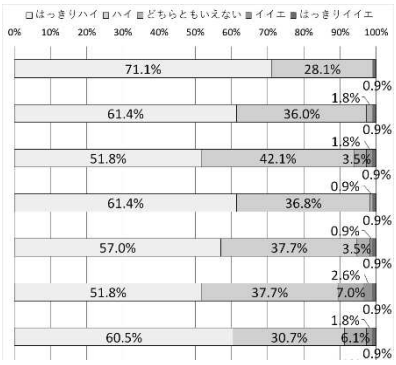
これらの結果から，ＥＳＤの概念形成について，グローバル人材育成科や各教科の学習事項として位置付けることは，生徒が「持続可能な社会」に関する正しい知識を身に付ける上で一定の成果が得られるものと考察する。

③　アンケート等の結果から

以下に，「当校の研究に関するアンケート」（５：はっきりハイ，４：ハイ，３：どちらともいえない，２：イイエ，１：はっきりイイエ）の回答数値を示す。

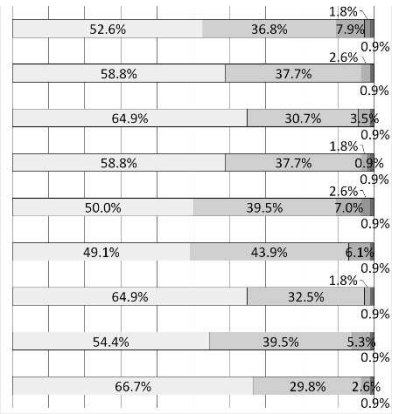
＜生徒アンケート（2018 年 12 月実施）の３年生の回答（n=114）＞

質問内容	平均
課題に応じて，必要な情報を集めることができる。	4.7
集めた情報を，整理することができる。	4.6
課題について話し合うときに，自ら新しいアイデアを出すことができる。	4.4
課題について話し合うときに，視点を決めてアイデアを比較することができる。	4.6
課題について話し合うときに，多くのアイデアを統合して１つにまとめることができる。	4.5
活動を進める前に，活動のゴールを思い描くことができる。	4.4
活動を進める前に，自分たちで役割分担や今後の予定を考えることができる。	4.5



※　「学校における持続可能な発展のための教育（ＥＳＤ）に関する研究［最終報告書］」（国立教育政策研究所 2012 年３月 pp. 3-6）

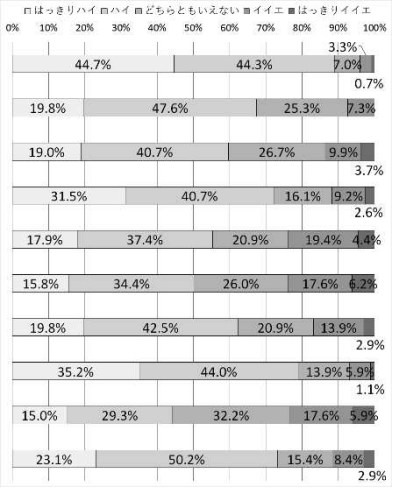
活動を進める際に，協力してほしい外部の人と，活動や予定を調整することができる。	4.4
実際に活動を進める前に，自分たちでリハーサルや試行をすることができる。	4.5
活動を進める際に，進んで自らの役割を行うことができる。	4.6
課題に取り組むときに，一緒に活動する仲間の話を共感的に聞き，考えや立場を理解することができる。	4.5
発表を行うときに，相手の様子に応じて発表内容を変えたり，相手の質問にすぐにその場で答えたりすることができる。	4.4
聞き手を踏まえ要点を絞ったり，分かりやすくまとめたりして発表を行うことができる。	4.4
活動に取り組むときに，その場にふさわしい言葉遣いをしたり，行動をしたりすることができる。	4.6
同じ課題を追及する仲間以外とも関わって，これまでにない新しいものを創り出すことができる。	4.5
同じ課題を追及する仲間以外とも関わって，互いにメリットのある良好な関係を築き，活動をすることができる。	4.6



これらの質問は，アビリティ育成の素地となる 16 の『スキル』を基に設定されている。どの項目も肯定的回答（５又は４）の割合は 80%以上であることから，「自分は場に応じてアビリティを発揮することができる（発揮している）」と自覚している生徒が増えていると考える。

＜保護者アンケート（2018 年 12 月実施）の回答（n=273）＞

質問内容	平均
生徒は，新聞や本，ウェブサイトを利用して知りたいことを調べている。	4.3
生徒は，１つの情報だけを鵜呑みにせず，複数の情報を比べることができる。	3.8
生徒は，家族で行動するときは，幾つかの方法を提案するなど，発想力が豊かである。	3.6
生徒は，学習やスポーツなど，様々な活動に目標をもって取り組んでいる。	3.9
生徒は，物事に取り組む際は，計画を立て，見通しをもって行動している。	3.5
生徒は，家庭での自らの役割に，進んで取り組んでいる。	3.4
生徒は，自分の考えを分かりやすくまとめて，伝えることができる。	3.6
生徒は，相手や場を意識して，適切な言葉遣いで伝えることができる。	4.1
生徒は，積極的に地域の方と関わるなど，家族以外の人の役になっている。	3.3
生徒は，身近な地域や世界で問題になっていることについて興味があり，話題にすることがある。	3.8



生徒アンケートと同様に，保護者アンケートのこれらの質問も，アビリティ育成の素地となる『スキル』を基に設定されている。生徒の回答と比べると数値は低いものの，全体としては多くの項目で平均が 3.5 を上回っており，よい傾向にあると言える。平均が 4.0 を上回っている項目は，**［情１　情報収集］［ｺﾐ４　礼儀作法］**に関するものであり，このことから，生徒は校外においても【情報統合力】【コミュニケーション力】といったアビリティを発揮していると考える。

2)　教員への効果

以下に，「当校の研究に関するアンケート」（５：はっきりハイ，４：ハイ，３：どちらともいえない，２：イイエ，１：はっきりイイエ）の回答数値を示す。

質問内容	肯定的評価（４又は５）の割合（%）					
	2018.1（n=16）			2018.10（n=16）		
		５	４		５	４
各教科の学習に加え，「情報統合力」「代替思考力」のように，これからの 社会で求められる資質・能力を育成することは大切だと思う。	100.0	93.8	6.2	100.0	87.5	12.5
これからの社会で求められている資質・能力を育成する「グローバル人材育成科」のような教科は必要だと思う。	100.0	81.2	18.8	100.0	68.8	31.2
子供たちの学力や資質・能力の育成のために，これまでの教育課程と比べ，年間授業時数を増やしたことはよいと考える。	62.5	25.0	37.5	81.3	12.5	68.8
アビリティ（『スキル』）について，生徒は教師が発揮を意図・期待したものだけでなく，自発的に授業の中で発揮していると思う。	93.3	33.3	60.0	100.0	56.2	43.8
生徒は，培ったアビリティ（『スキル』）を授業以外の場面でも発揮していると思う。	87.6	43.8	43.8	100.0	75.0	25.0
アビリティ育成を視点とすることで，授業における指導方法は改善されると思う。	100.0	75.0	25.0	100.0	68.8	31.3
アビリティ育成を視点とすることで，教員としての授業実践意欲は高まると思う。	93.7	37.5	56.2	100.0	62.5	37.5

アンケート結果から，授業中だけでなく，様々な場面で，生徒が自発的にアビリティ（『スキル』）を発揮しているという手応えを感じており，また，本教育課程におけるアビリティ育成を視点とした授業実践が，より具体的な指導方法の改善につながったり，教員の意欲を向上させたりしていると捉えていることが分かった。

また，グローバル人材育成科では，これまでの授業実践の蓄積を基に職員研修を実施し，各『スキル』が発揮された理想的な姿，記録の仕方，振返りの書き方など，授業を担当する教員が共通の基準で指導を行うことができた。 このことは，生徒だけでなく教員自身も，アビリティを育成するグローバル人材育成科の価値を再確認することにつながったと考える。

3) 保護者への効果

以下に，「当校の研究に関するアンケート」（５：はっきりハイ，４：ハイ，３：どちらともいえない，２：イイエ，１：はっきりイイエ）の回答数値を示す。

＜保護者アンケートの回答＞

各教科の学習に加え，「情報統合力」「代替思考力」のように，これからの社会で求められる資質・能力を育成することは大切だと思う。

		2016		2017		2018	
		７月 (n=359)	12月 (n=358)	７月 (n=331)	12月 (n=329)	７月 (n=287)	12月 (n=273)
肯定的回答		95.0%	94.2%	96.6%	96.3%	96.6%	96.4%
内訳	５	67.1%	66.5%	77.0%	71.7%	74.6%	75.1%
	４	27.9%	27.7%	19.6%	24.6%	22.0%	21.3%

これからの社会で求められている資質・能力を育成する「グローバル人材育成科」のような教科は必要だと思う。

		2016		2017		2018	
		７月 (n=359)	12月 (n=358)	７月 (n=331)	12月 (n=329)	７月 (n=287)	12月 (n=273)
肯定的回答		91.1%	88.2%	95.2%	93.0%	93.0%	92.6%
内訳	５	56.5%	53.6%	65.3%	59.6%	68.6%	69.2%
	４	34.6%	34.6%	29.9%	33.4%	24.4%	23.4%

子供たちの学力や資質・能力の育成のために，これまでの教育課程と比べ，年間授業時数を増やしたことはよいと考える。

		2016		2017		2018	
		７月 (n=359)	12月 (n=358)	７月 (n=331)	12月 (n=329)	７月 (n=287)	12月 (n=273)
肯定的回答		81.6%	86.3%	84.3%	86.6%	87.8%	89.0%
内訳	５	57.6%	53.9%	60.1%	56.5%	64.8%	63.7%
	４	24.0%	32.4%	24.2%	30.1%	23.0%	25.3%

以上の３項目について，およそ９割の保護者が肯定的に評価しており，「はっきりハイ」と回答する保護者の割合が増加している。本教育課程やその目指すところを理解し，支持しているものと判断できる。研究たよりで研究の概要を説明したり，グローバル人材育成科『スキル』向上コンテンツにおける生徒の活動の様子を，学年たよりやウェブサイトで発信したりしたことで，具体的な理解を得られたものと考える。

⑵ 実施上の問題点と今後の課題

研究の実施上の問題点としては，年間授業時数を増やした教育課程を編成することで時数の増加に伴う教員の負担も増えること，パフォーマンステストの実施や採点，分析に時間が掛かることが挙げられる。

本研究では，パフォーマンステストを通じて教師がみとったアビリティを，直接生徒に評価として返すことを行わなかった。そのため，生徒が発揮したと自覚している『スキル』と教師がみとった『スキル』に差があることもあった。自覚なく発揮された『スキル』がある場合，それを評価として定期的，または即時的に返していくことで，生徒は自分に何ができるかを一層自覚し，他の場面でも意図してアビリティを発揮するようになるのではないかと考える。「『スキル』を視点としたアビリティのみとり」を，学びに向かう力を高めるための評価につなげられるよう，今後の研究を進めたいと考えている。